View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

研究ノート

ヴィクトル・ユゴーとフランス文学

高　村　忠　成

1．はじめに

フランス文学といえば，世界を代表する文学である，といっても過言ではありません。もちろんこれには異論もあるでしょうが，繊細な人間性の探求，心理分析の鋭さ，それでいながら社会的関心の強いことなど，人間と社会を全体として木目細かく，かつ，大胆にとらえている点など卓越しております。しかも，文体は，一様に明晰さと論理性に富んでおり，とくに，その人間中心主義をモチーフにしている点は傑出しているといえましょう。

フランス文化といえば，香水，ファッション，ワインを思い浮かべますが，じつはフランス文学なのです。それほど，フランス文学は，フランスはもとより，日本でも世界でも，長い間，多くの人々に愛されてきたのです。

ところが，そのフランス文学も，ひと口にフランス文学といっても，その特徴は何か，代表的作品はどれかと問われると，簡単に答えられないほど複雑です。幅広さと多様性に富んでいるのです。それは，大きくいえば，11世紀に始まり，21世紀の今日まで，変遷をかさねてきているのです。変化，変化のうえにフランス文学は成立しているといってもよいでしょう。この点をもう少し詳しくのべると次のようにいえます。

フランス文学は，叙事詩に始まり，抒情詩，物語，コント，小説，戯曲，エセー，批評，哲学，歴史までがすべて「文学」という言葉によって包み込まれているのです。じつに，範囲が広く，中味も多岐にわたっているといえます。逆にいうと，フランス人は，哲学や歴史までも，文学的表現で表わしてしまうという特技をもっているといえるのです。

こうしたフランス文学の中にあって，ヴィクトル・ユゴーは特別の地位を占めています。ユゴーの作品は，詩にはじまって戯曲，小説にいたるまで非常に広範囲にわたっております。しかも，社会的問題についても鋭い発言をしており，とくに女性や子供の権利を守ったり，死刑廃止を訴えたことは有名ですが，何よりも，皇帝ナポレオンⅢ世と対決して，19年間も亡命生活を送ったことは特筆に値するといえましょう。信念の人なのです。とくに生涯において，『レ・ミゼラブル』，『九十三年』などの大衆小説を残したことは，フランス文学界における不滅の金字塔です。

ユゴーがなくなった時には，国葬とされ，しかも200万人もの人々が葬儀に参列して，別れを惜しんだのです。これを見ても，ユゴーがフランス文学を代表する偉大な一人であったことは疑いないと思います。

ここでは，フランス文学の足跡をたどりながら，ユゴー文学の出現までをのべてみたいと思います。

2．フランス文学の足跡

① 起源

フランス文学の起源については，諸説ありますが，一般的には，11世紀半ばであるといわれております。とくに，『聖アレクシス伝』をあげる人が多く，そこには，フランス語による文学的表現が初めて見られるとの指摘があります。内容的には，宗教と深く結びついている点に特徴があるといえましょう。

11世紀末から12世紀にかけては，『ロランの歌』があらわれます。これは，シャルルマーニュ大帝が異教徒サラセン人を制圧するため，スペインに軍を進める時，忠臣ロランの英雄的功績をたたえた作品です。武勲詩といってよいでしょう。

② 中世

中世になると抒情詩が誕生します。これは，物語形式の文学で，騎士道恋愛物語が著名です。

③ 16世紀

この時代は，ルネサンス期にあたり，文学にも明晰さが求められました。全体として，秩序を志向する傾向が強かったといえましょう。

④ 17世紀

ルイ王朝の時代にあたります。古典主義の黄金時代ともいわれております。コルネイユ，ラシーヌの悲劇，モリエールの喜劇，フォンテーヌの寓話詩がその代表です。これらは，いずれも，人間の理性を普遍的価値としています。そして，物事をすべて筋道たてて理解しようと努力し，人間の理性で，情念や感情をも把握しようと試みているのです。

なお，古典主義時代の傑出した哲学者，思想家にデカルトとパスカルがおります。デカルトは，「我思う　故に我あり」との言葉で有名です。人間の理性を信頼し，理性にもとづく合理的な思考によって確実な真理をえることができると主張しました。彼は，神性を中心とした旧来の世界像を転換し，人間性を中心とする近代的世界像を樹立した人として有名です。これに対して，パスカルがおります。彼は，「人間は考える葦である」という言葉を残したことで知られています。パスカルは，人間の理性にもとづく合理的思考だけで物事を把握するには限界がある。合理的思考は，もちろん大事であるが，しかし，広大な宇宙には理性だけでは解明で

きないものがある，と主張したのです。すなわち，理性と同時に神秘さを有する神が必要であり，この両者の相互補完関係によって事象の全体像の把握が可能になるとしたのです。

⑤ 18世紀

この時代は啓蒙主義の時代といわれております。有力な思想家や哲学者が出て，彼らは思想，哲学を小説の形をとって表現したりしました。

まず，ヴォルテールです。ユゴーが最も崇拝した人です。彼は，宗教とか，因襲とかが作り出している制約を憎みました。これが，人間の自由な思考を圧迫しているのだと弾呵します。主義や思想やあらゆる領域での自由を束縛するものを批判し，その改革を試みたのです。但し，ヴォルテールの改革の方法は穏健で，漸進的なものでした。

ヴォルテールと同様に，自由を強調したのがルソーでした。彼は，自然状態というモデルを想定します。そこでは，人間はすべて自由であり平等でした。ところが，人類が文明を発展させるとさまざまな社会制度が生まれ人間はそれに束縛されると同時に，人々の間に不平等が生まれるようになりました。とくに，人間が本来もっているはずの権利である人権までが，政治によって制約されてしまいます。そこで，このような状態を否定し，人間が文明の悪に汚されていない姿を現出することが肝要であると説きます。有名な「自然に戻れ」との主張です。ルソーは，その自然状態への回帰を，一気に，急進的に進めることを主張するのです。彼のこうした考えは，後のフランス革命に大きな影響を与えます。

そして，ディドロです。彼は，自然主義，唯物論，無神論を説きます。とくに，知識の体系化をはかり，有名な『百科全書』を編集し，刊行したりします。

全体として，18世紀は転換期にあたっていたといえましょう。すなわち，政治的には絶対君主制の時代から民主制の時代に，宗教のうえでは，カトリック教会の権威が弱まり信仰の自由へ，そして，文化の面では，古典主義からロマン主義の時代へと，あらゆるものが着実に変化し，転換していったのです。

⑥ 19世紀

この時代は，ロマン主義が花開いた時です。1789年に勃発したフランス革命は，啓蒙主義という理性を重視した思想に立脚した理想的な革命と思われました。だが，その結果は，おびただしい流血と残虐の惨事をもたらしてしまいました。フランス革命のこうした面の反省から，19世紀に入ると，人間は理性だけではいけない，感性をあわせもった古典主義ではないロマン主義を重視する必要があるとの声があがってきます。とくに，小説が大事であるとみなされるようになります。それは，人間の生き方を知るうえで不可欠の働きをなすからであるとみなされるのです。同時に，教育を普及したり，ジャーナリズムを拡大する必要性も力説されたりします。

こうした流れのうえに，バルザックの『人間喜劇』，スタンダールの『赤と黒』，

『パルムの僧院』といった作品が現われてきます。ユゴーの出現は，この頂点に立つものといってよいでしょう。詩人である彼はロマン派の旗手として，詩はもとより，戯曲，小説を次々と発表していきます。とくに，書くことだけにとどまらず，現実の社会や政治に身をおき，現状の変革を試みていったのです。フランス文学史の頂点の一人がユゴーといってよいでしょう。

以上見てきましたように，フランス文学といっても，じつに幅広く，詩や小説，そして思想，哲学，歴史までもその分野に収めているのです。それだけに，フランス文学は，重厚さと幅広さを有しているのです。

3．ヴィクトル・ユゴーという人

① 進取の人

ユゴーは，多様性，多面性をもつフランス文学の頂点に立つ人ですが，どのような特徴をもっていたのでしょうか。彼は，何よりもまず人間を信頼し，自由を追求し，権力や権威と戦う信念の人でした。とくに，言論，言葉の力をもって社会を変革しようとする情熱の人でもありました。文化や知性の力で，新しい時代を築こうとする挑戦の精神の持ち主だったのです。

ユゴーのこうした人となりをもっと日常生活の身近かなエピソードを通して，紹介すると次のような例があげられます。

まず，彼は，蒸気機関車に初めて乗った作家であるといわれています。ユゴーが最初に機関車を見た時，彼は「極めて醜い」といいました。ところが，乗ってみた時，「私は鉄道と和解した」とのべて，感動したのです。

また，大変な写真愛好家であったようです。写真の技術は，1828年に発明をみましたが，ユゴーは気に入り写真を愛用します。ひとつは，家族の写真を沢山とっております。また，もうひとつには，亡命先での写真を大量に残してあります。弾圧されても，「我，健在なり」との姿を政府に示さんがためであったといわれております。今日でいう情報操作術の天才であったといえましょう。彼にとっては，写真もまた戦いの武器だったのです。

そして，ユゴーは，1840年，37才の時，生命保険に入ります。当時は，生命保険はまだ一般的には受け入れられておらず，非道徳的であるとさえいわれていました。彼はそのようなことは意に介さず，それに加入したのです。こうした点にも，ユゴーの進取の気風を見てとることができます。

その他，ユゴーはこれからは石油の時代がくるとみて，石油を採掘せよとか，海の資源を開発すべきであるとか主張しておりました。ともかく，彼は進歩を信じ，革新の息吹きにあふれる時代の革命児であったのです。それはまた，彼には時代の本質を読む力があったということでしょう。

② 人間観

ユゴーは，どのような人間観をもっていたのでしょうか。前述しましたように，

彼は，人間に対する絶対の信頼を置いておりました。人間はもともとは悪ではない。ではその人間はなぜ犯罪を犯すのか。ユゴーは，それは，社会が個人に対して厳しい条件をつきつけるからであるといいます。とくに，犯罪を犯した者に社会は苛酷にあたるのがよくないと彼はいいます。しかし，貧しくとも罪を犯す者と犯さない者がいるではないか。その差はどこから出てくるのか。それに対してユゴーは答えます。それは，性格の弱さや良心がよくめざめているか否かという違いである。罪を犯す者はつねに弱さがある。この弱さは社会が守ってあげなければならない，と彼は強調します。社会的人類愛が必要というのです。

同時にユゴーは，悪と良心の戦いが人間にはあり，良心の奥にある神の摂理が肝要であるとも強調します。社会をよくするというが，それには同時に人間もよくしなければならない。それには教育が肝要であると彼は主張します。人間が強い行動をとるようにしなければならない。人間は信念をつらぬくためには死ぬこともあるとユゴーはさけびます。

18世紀の古典主義の時代までは，人間が現象の中心にあるとはいえませんでした。しかし，19世紀に入ると，人間が主体となり世界像を構築するようになるといえます。じつに世界を思い描く主体は人間であるという考え方が確立してくるのです。こうした人間観を代表するのがユゴーでした。彼の有名な言葉に「海洋よりも壮大なる光景　それは天空である。天空よりも壮大なる光景　それは実に人の魂の内奥である」（『レ・ミゼラブル』）というのがあります。まさに，人間を中心にすえ，人間こそがすべての主体であると説く，彼の考えを表現したものといえましょう。

こうした人間観に立つユゴーが強調したのは，最後は人間革命でした。彼は文学，社会，政治の改革を志向しますが，しかし，その究極は人間革命であると主張するのです。ユゴーは1851年の演説で訴えます。「人は言うだろう。世界第一の国民は，ちょうどホメロスがつくった神々が三歩歩いたように，三つの革命をなしとげた。この三つの革命は一つの形になる。部分的な革命ではない。それは人間革命である」（『行為と言葉――追放前』）と。ここでいう三つの革命とは，1789年，1830年，1848年の革命です。つまり，フランスは，これまで３つの革命を経験したが，それらがめざしたものは人間革命につきるということを言っているのです。彼は，人間革命について具体的に説明しています。「それは，一国民の利己的な叫びではない。……それは有史以来の人類共通の苦しみを解決することである」といいます。つまり，人間革命とは，「何世紀にもわたる奴隷の時代，隷従の時代，神政政治の時代，封建制度の時代，宗教裁判の時代，あらゆる名における専制君主の時代，あらゆる形の人間に対する刑罰の時代の後に現われる，厳かな人権宣言である」というのです。これは，人類は，これまで人間を束縛してきた社会悪の構造を打ち破り，最終的に人間革命へ辿り着くべきであるということを言っております。ユゴーは，1876年，女性作家ジョルジュ・サンドの葬儀の時にも，次のようにのべています。「今世紀（19世紀）において，フランス革命は終わりを告げ，人間革命が始まる」と。ただ，ユゴーが言っている人間革命とは個人の次元の革命にとどまるものではありません。人間とは人類全体という普遍的な意味なのです。

じつにユゴーによると，人間革命は大海よりも大きく，大空よりも大きなものなのです。それを人類全体として，いかに開き，どう変革していくか，これが人間革命なのです。大作『レ・ミゼラブル』もこの点を表現しようとしたのではないでしょうか。人間革命のドラマをつづったのが，あの大衆小説であり，そこにはまた，ユゴーの人間観が凝縮しているといえましょう。

③ 宗教観

ユゴーは，宗教を重視しておりました。彼は若い頃は，王政主義者であり，カトリックも信じていました。しかし，年輪を重ねるたびにカトリック，キリスト教からはなれ，晩年は降霊術のような宗教的なものにのめり込んでいきます。こうした彼は，どのような宗教観をもっていたのでしょうか。

フランス革命は，キリスト教会に対する戦いでもあり，宗教革命であったともいえます。革命以後の思想家は洗礼を受けませんでした。ユゴーもまたそうでした。彼は宗教は認めていました。しかし，キリスト教には否定的であったのです。とくにカトリックは教育権を握り，あらゆる制約を課していました。その束縛を嫌うユゴーは，教会の外に身を置くことにします。自由な発想をもつ必要性を彼は感じたのです。

とくに堕落した聖職者が寄生する，腐敗した修道院などについては厳しく弾呵しました。「僧侶や，誤まった信仰や，えせ信心や，偏見といった亡霊は，亡霊のくせに生にしがみつき，影法師のくせに歯をむき，爪をたてる。そういうものは体当たりでしめつけ，これに戦いをいどまなければならない。戦いは休みなくつづけなければならない」（『レ・ミゼラブル』）と。ユゴーは，宗教はあくまでも人間のためにあると考えていました。宗教は，人道のために献身するものであって，虚偽を許さず，偽善を排し，一番，苦しんでいる人のために戦うのが宗教であると強調するのです。したがって彼は，「人間の中に無限のものを見出す」正しい宗教に対しては，寛容でした。「私は尊敬の念を覚える」といって擁護したのでした。

1881年，ユゴーは死の２年前に遺言に書きました。「私は，５万フランを貧しい人々に与える。私は，それらの人々の柩で墓地に運ばれることをのぞむ。私はあらゆる教会の弔辞をことわる」（『貧者用の柩車で運ぶ』）と。彼は，このように宗教の必要は認めていました。しかし，堕落したキリスト教や，制約を課して人々の魂の自由を奪うカトリックなどには否定的でした。宗教を２つに分け，真の自由をもたらすそれには共鳴し，逆のものに対しては徹底的に戦ったのでした。ユゴーは，最後は，精神の真の解放を求めて，宗教的な世界に入っていくのです。彼の宗教観は，ひと言でいえば，キリスト教会には懐疑的であったが，神秘的なものには敬虔であったといえましょう。

こうした宗教観に立つユゴーにとって，死は恐るべきものではありませんでした。彼によると，それは，「存在のひとつの変化にすぎない」というものです。死によっても人間生命の本質それ自体は存続するというのです。彼は，つねに永遠の生命を志向していたといえましょう。

４．むすびに

フランス文学の特徴は，冒頭において，叙事詩から始まって，思想，歴史にいたるまでじつに幅広い，包括的内容を含むものであるといいました。ユゴーの作品は，まさにこの文学の特徴を代表するようにじつに多岐にわたっております。例えば，ユゴーは元来は詩人ですが，彼の詩ひとつとりあげても，その範囲は膨大に及びます。叙事詩，叙情詩，風刺詩，劇詩，社会詩，宗教哲学詩など，はなばなしい活動を行っております。これが，小説などの分野をも入れますと，ユゴーの文学の範囲は広大になるといってよいでしょう。まさに，広範囲に及ぶフランス文学の特徴を彼は象徴的に収束して表現しているのです。この意味でもユゴーはフランス文学を代表する一人といえます。

こうしたユゴーの文学，それを通しての思想や哲学は，世界に大きな影響を与えていきます。とくに，彼の思想がトルストイに引き継がれ，それがやがて世界各国の独立運動に多大な感化を及ぼしていったことは有名な話です。なかんづく，中南米の独立運動はその典型的な例といえましょう。

このように，フランス文学は世界に冠たる位置をしめ，それを代表するのがユゴーであることは論をまたないと思います。彼のその思想は，文学界だけではなく，現実の世界にも大きな影響を及ぼし，20世紀の世界像を形成してきたといってよいでしょう。

参考文献

辻昶『我が人生・文学・出会い　―ユゴーと『人間革命』―』（聖教新聞社，1994年）
池田大作『世界の文学を語る』（潮出版社，2001年）
新倉他『事典　現代のフランス』（大修館，1985年）
菅野他『読む事典　フランス』（三省堂，1990年）
田辺保編『フランス文学を学ぶ』（世界思想社，1998年）
東京都立大学フランス文学研究室編『フランスを知る　新〈フランス学〉入門』（法政大学出版局，2003年）